

所謂今度の事

石川啄木

目次

一	3
二	3
三	4
四	5
五	5

二・三日前の事である。途で渴を覚えてとあるビイヤホールに入ると、窓側の小さな卓を囲んで語っている三人連の紳士があった。私が入って行くと三人は等しく口を噤んで顔を上げた。見知らぬ人達である。私は私の勝手な場所を見付けて、煙草に火を点け、口を湿し、そして新聞を取上げた。外に相客というものは無かった。

やがて彼等はまた語り出した。それは「今度の事」についてであった。今度の事の何たるかはもとより私の知らぬ所、また知ろうとする気も初めは無かった。すると、ふと手にしている夕刊のある一処に停まったまま、私の眼は動かなくなった。「今度の事はしかし警察で早く探知したからよかったです。焼討とか赤旗位ならまだいいが、あんな事を実行されちゃそれこそ物騒極まるからねえ。」そう言う言葉が私の耳に入って来た。「僕は変な事を聞いたよ。首無事件や五人殺しで警察が去年からさんざん味噌を付けてるもんだから、今度の事はそれ程でも無いのをわざとあんなに新聞で吹聴させたんだって噂もあるぜ。」そう言う言葉も聞えた。「しかし僕等は安心して可なりだね。今度のような事がいくら出て来たって、殺される当人が僕等でないだけは確かだよ。」そう言って笑う声も聞えた。私は身体中を耳にした。-今度の事あって以来、私はそれについての批評を日本人の口から聞くことを、ある特別の興味をもって待っていた。今三人の紳士の取交わしている会話はすなわちそれである。-今度の事と言うのは、実に、近頃幸徳等一味の無政府主義者が企てた爆烈弾事件の事だったのである。

私のその時起した期待はしかしどれだけも満たされなかった。何故なればかの三人は間もなく勘定を済して出て行ったからである。-明治四十年八月の函館大火の際、私も函館にあって親しくかの悲壮なる光景を目撃した。火事後、家を失った三・四万の市民は、いずれも皆多少の縁故を求めて、焼残った家々に同居した。いかに小さい家でも二家族もしくは三家族の詰込まれない家は無かった。その時私は平時において見ることの出来ない、不思議な、しかも何かしら愉快なる現象を見た。それは、あらゆる制度と設備と階級と財産との攪乱された処に、人間の美しき性情のかえって最も赤裸々に発露せられたことであった。彼等の蒙った強大なる刺激は、彼等をして何の顧慮もなく平時の虚礼の一切を捨てさせた。彼等はただ彼等の飾気なき相互扶助の感情と現在の必要とに拠って、孜孜として彼等の新しい家を建つことに急いだ。そしてその時彼等が、その一切の虚礼を捨てる為にした言訳は、「この際だから」という一語であった。この一語はよく当時の函館の状態を何人にも理解させた。所謂言語活用の妙である。-そして今かの三人の紳士が、日本開闢以来の新事実たる意味深き事件を、ただ単に「今度の事」と言った。これもまた等しく言語活用の妙が無ければならぬ。「何と巧い言い方だろう!」私は快く冷々するコップを握ったまま、一人幽かに微笑んで見た。

間もなく私もそこを出た。そうして両側の街灯の美しく輝き始めた街に静かな歩を運びながら、私はまた第二の興味に襲われた。それは我々日本人のある性情、二千六百年の長き歴史に養われて来たある特殊の性情についてであった。-この性情は蓋し我々が今日までに考えたよりも、なお一層深く、かつ広いものである。かの偏えにこの性情に固執している保守的思想家自身の値踏みしているよりも、もっともっと深くかつ広いものである。-そして、千九百余年前のユダヤ人が耶蘇キリストの名をあからさまに言うを避けてただ「ナザレ人」と言った様に、ちょうどそれと同じ様に、かの三人の紳士をして、無政府主義という言葉の口にするを躊躇してただ「今度の事」と言わしめた、それもまた恐らくはこの日本人の特殊なる性情の一つでなければならなかった。

二

蓋し無政府主義という語の我々日本人の耳に最も直接に響いた機会は、今日までの所、前後二回しかない。無政府主義という思想、無政府党という結社のある事、及びその黨員が時々凶暴なる行為をあえてする事は、書籍により、新聞によって早くから我々も知っていた。中には特にその思想、運動の経過を研究して、邦文の著述をなした人すらある。しかしそれは洋を隔てた遙か遠くの欧米の事であった。我々と人種を同じくし、時代を同じくする人の間にその主義を信じ、その党を結んでいる者のある事を知った機会はついに二回しかない。

その一つは往年の赤旗事件である。帝都の中央に白昼不穩の文字を染めた紅色の旗を翻して、警吏の為に捕われた者の中には、数名の若き婦人もあった。その婦人等-日本人の理想に従えば、穏しく、しとやかに、よろづに控え目であるべきはずの婦人等は、厳かなる法廷に立つに及んで、何の臆する所なく面を揚げて、「我は無政府主義者なり。」と言った。それを伝え聞いた国民の多数は、目を丸くして驚いた。

しかしその驚きは、仔細に考えて見れば決して真の驚きではなかった。例えばかの事件は、芸題だけを日本字で書いた、そしてそのセリフの全く未知の国語で話される芝居の様なものであった。国民の読み得た芸題の文字は、何様耳新しい語ではあったが、耳新しいだけそれだけ、聞き慣れた「油地獄」とか「吉原何人斬り」とか言うのよりも、なお一層上手な、残酷な舞台面を持っているらしく思われた。やがて板に掛けられた所を見ると、喜び、泣き、シナを作るべき筈の女形が、男の様な声で物を言い、男の様に歩き、男も難しとする様な事を平気でした。観客は全く呆気に取られてしまった。言い換えれば、舞台の上の人物が何のつもりで、何のためにそんな事をするのかは少しも解することが出来ずに、ただそのしぐさの荒々しく、自分等の習慣に戻っているのを見て驚いたのである。したがってその芝居-芸題だけしか翻訳されていなかった芝居は、ついに当を取らずに楽になった。またしたがって観客の方でも間もなくその芝居を忘れてしまった。

もっともそれは国民の多数者についてである。中に少数の識者があって、多少芝居の筋を理解して、翌日の新聞に劇評を書いた。「社会主義者諸君、諸君が今にしてそんな軽率な挙動をするのは、決して諸君のためではあるまい。そんな事をするのは、ようやく出来かかった国民の同情を諸君自ら破るものではないか。」と。これは当時にとっては、確かに進歩した批評のしかたであった。しかし今日になってみれば、そのいわゆる識者の理解なるものも、決して徹底したものであったとは思えない。「我は無政府主義者なり。」と言う者を「社会主義者諸君。」と呼んだ事が、取りも直さずそれを証明しているではないか。

三

そうして第二は言うまでもなく今度の事である。

今度の事とは言うものの、実は我々はその事件の内容を何れだけでも知っているのではない。秋水幸徳伝次郎という一著述家を首領とする無政府主義者の一団が、信州の山中に於いて密かに爆烈弾を製造している事が発覚して、その一団及び彼等と機密を通じていた紀州新宮の同主義者がその筋の手に検挙された。彼等が検挙されて、そしてその事を何人も知らぬ間に、検事局は早くも各新聞社に対して記事差止の命令を発した。いかに機敏なる新聞も、ただ叙上の事実と、及び彼等被検挙者の平生について多少の報道をなす外にしかたがなかった。-そしてかく言う私のこの事件に関する知識も、ついに今日までに都下の各新聞の伝えた所以上に何物をももっていない。

もしも単に日本の警察の成績という点のみを論ずるならば、今度の事件のごときは蓋し空前の成功と言ってもよからうと思う。ただに迅速に、かつ遺漏なく犯罪者を逮捕したというばかりでなく、事を未然に防いだという意味において特にそうである。過去数年の間、当局は彼等いわゆる不穩の徒のために、ただに少なからざる機密費を使ったばかりでなく、専任の巡査数十名を、ただ彼等を監視させるために養って置いた。かくのごとき心労と犠牲とを払って、それで万一今度の様な事を未然に防ぐことが出来なかったなら、それこそ日本の警察がその存在の理由を問われてもしかたのない処であった。幸いに彼等の心労と犠牲とは今日の功を収めた。

それに対しては、私も心から当局に感謝するものである。蓋し私は、あらゆる場合、あらゆる意味において、極端なる行動というものは真に真理を愛する者、確實なる理解をもった者の執るべき方法で無いと信じているからである。正しい判断を失った、過激な、極端な行動は、例えば導火力の最も高い手擲弾のごときのものである。未だ敵に向って投げざるに、早く已に自己の手中にあって爆発する。これは今度の事件の最もよく証明している所である。そうして私は、たとえその動機が善であるにしろ、悪であるにしろ、観劇的興味を外にしては、我々の社会の安寧を乱さんとする何者に対しても、それを許すべき何等の理由をもっていない。もしも今後再び今度の様な計画をする者があつたらば、私はあらかじめ当局に対して、今度以上の熱心をもってそれを警戒することを希望して置かねばならぬ。

しかしながら、警察の成功は警察の成功である。そして決してそれ以上ではない。日本の政府がその隷属する所の警察機関のあらゆる可能性を利用して、過去数年の間、彼等を監視し、拘束し、ただにその主義の宣伝ないし実行を防遏したのみでなく、時にはその生活の方法にまで冷酷なる制限と迫害を加えたに拘わらず、彼等の一人といえどもその主義を捨てた者はなかった。主義を捨てなかったばかりでなく、かえってその覚悟を堅めて、ついに今度の様な凶暴なる計画を企て、それを半ばまで遂行するに至った。今度の事件は、一面警察の成功であると共に、また一面、警察ないし法律という様なものの力は、いかに人間の思想的行為にむかって無能なものであるかを語っているではないか。政府並に世の識者のまず第一に考えねばならぬ問題は、蓋しここにあるであろう。

四

ヨーロッパにおける無政府主義の発達及びその運動に多少の注意を払う者の、まず最初に気の付く事が二つある。一つは無政府主義と言われる者の今日までなした行為は凡て過激、極端、凶暴であるに拘わらず、その理論においては、祖述者の何人たると、集産的たると、個人的たると、共産的たるとを問わず、ほとんど何等の危険な要素を含んでいない事である。(ただ彼等の説く所が、人間の今日に於ける生活状態とは非常に距離のある生活状態の事であるだけである。) も一つは、それら無政府主義者の言論、行為の温和、過激の度が、不思議にも地理的分布の關係を保っている事である。-これは無政府主義者の中に、クロポトキンやレクラスの様な有名な地理学者があるからという洒落ではない。

前者については、私は何もここに言うべき必要を感じない。必要を感じないばかりでなく、今の様な物騒な世の中で、万一無政府主義者の所説を紹介しただけで私自身また無政府主義者であるかのごとき誤解をうける様な事があっては、迷惑至極な話である。そしてまた、結局私は彼等の主張を誤りなく伝える程に無政府主義の内容を研究した学者でもないのである。-が、もしも世に無政府主義という名を聞いただけで眉をひそめる様な人があって、その人が他日かの無政府主義者等の所説を調べてみるとするならば、きっと入口を間違えて別の家に入って来たような驚きを経験するだろうと私は思う。彼等のある者にあつては、無政府主義というのはつまり、凡ての人間が私慾を絶滅して完全なる個人にまで発達した状態に対する、熱烈なる憧憬に過ぎない。またある者にあつては、相互扶助の感情の円満なる発現を遂げる状態を呼んで無政府の状態と言つてに過ぎない。私慾を絶滅した完全なる個人と言ひ、相互扶助の感情と言ふがごときは、いかに固陋なる保守道徳家にとつても左まで耳遠い言葉であるはずがない。もしこれらの点のみを彼等の所説から引離して見るならば、世にも憎むべき凶暴なる人間と見られている無政府主義者と、一般教育家及び倫理学者との間に、どれほどの相違もないのである。人類の未來に関する我々の理想は蓋し一である-洋の東西、時の古今を問わず、畢竟一である。ただ一般教育家および倫理学者は、現在の生活状態のままでその理想の幾分を各人の犠牲的精神の上に現わそうとする。個人主義者は他人の如何に拘わらずまず自己一人の生涯にその理想を體現しようとする。社会主義者にあつては、人間の現在の生活がすこぶるその理想と遠きを見て、因を社会組織の欠陥に歸し、主としてその改革を計ろうとする。而してかの無政府主義者に至つては、実に、社会組織の改革と人間各自の進歩とを一挙にして成し遂げようとする者である。-以上は余り不謹慎な比較ではあるが、しかしもしこのような相違があるとすれば、無政府主義者とは畢竟「最も性急なる理想家」の謂でなければならぬ。既に性急である、故に彼等に、その理論の堂々として而して何等危険なる要素を含んでいないに拘わらず、未だ調理されざる肉を喰らうがごとき粗暴の態と、小兒をして成人の業に就かしめ、その能わざるを見て怒つてこれを蹴るがごとき無謀の拳あるは敢えて怪しむに足るのである。

五

もしその後者-無政府主義の地理的分布の一事に至つては、この際特に多少の興味を惹起すべき問題でなければならぬ。地理的分布-言う意味は、無政府主義とヨーロッパに於ける各国民との關係という事である。

凡そ思想というものは、その思想所有者の性格、経験、教育、生理的特質及び境遇の総計である。而して個人の性格の奥底には、その個人の属する民族ないし国民の性格の横たわっているのは無論である。—端的にここに必要なだけを言えば、ある民族ないし国民とある個人の思想との交渉は、第一、その民族的、国民的性格に於てし、第二、その国民的境遇(政治的、社会的状態)に於てする。そして今ここ無政府主義に於ては、第一は主としてその理論的方面に、第二はその実行的方面に関係した。

第一の関係は、我々がスチルネル、プルウドン、クロポトキン三者の無政府主義の相違を考える時に、直ぐ気の付く所である。蓋しスチルネルの所説の哲学的個人主義的なる、プルウドンの理論のすこぶる鋭敏な直観的傾向を有して、而して時に感情にはしらんとする、及びクロポトキンの主張の特に道義的な色彩を有する、それらは皆、彼等の各々の属する国民—ドイツ人、フランス人、ロシア人—という広漠たる背景を考うることなしには、我々の正しく理解する能わざる所である。

そして第二の関係—その国の政治的、社会的状態と無政府主義の関係は、第一の関係よりもなお一層明白である。

無政府主義図書館 (Japanese)

石川啄木
所謂今度の事

<https://www.ne.jp/asahi/anarchy/anarchy/data/takuboku01.html> (2024 年 3 月 14 日検索)

ja.theanarchistlibrary.org